

目的 明治・大正期の女子宮廷服の調査の際、宮廷における女子の祭事に関係した人々の装束に特殊性が認められたので、祭事服としての構成・縫製上の実態を考察した。

方法 江戸・明治・大正期の祭事に着用された小忌衣・采女装束・執事女孺装束の実物資料を調査し、装束構成・形態・地質・色目・文様・染色法・縫製技法等につき祭事服としての特徴を検討した。

結果 大嘗祭等の祭事に着用された衣服に日本古代そのままの形体が伝承されているのではないかと考えられる。すなわちその形態・地質・色目・文様等に古職をもつて生命とする祭祀に昔ながらの古い衣服の形式を残し今日に及んでいることに意味があると思われる。又縫製技法上にも布そのものの清浄さを残すための配慮が推定され、特にこれらは上衣として、着はなしに着装されるものに顕著に見られた。尚各装束の構成・縫製についても着装形態を考慮した結果と思われる実もあり報告する。